

ワインザー暮らし Ⅲ

みずき 啓

大英博物館

翌日、到着ほやほや、夫は会社へ、私は勇んで天下の大英博物館へ。地下鉄の駅はトッテナム・コートだったんじゃないかしら？通勤時間後の値下がり切符で来たせいか、人々もそれぞれの持ち場に納まって、街はガラんと清潔だった。

しかし、そっちのビルのためにはホームレスが丸まってる。夫は

「ロンドンのホームレスは決まって犬を連れてるよ」その青年ホームレスは犬代りに酒ビンを抱いていた。どっちも、多分温かくて自分を守ってくれる気がするんだよ、きっと。

食べ物のスタンドらしきが、車道と舗道の境目に客待ち顔。足を止める人はいない。

その先の広場が続いて、横に長い大理石の階段が大英博物館だった。イオニア式とかいう威圧的な大理石の柱の列。どこまで続くの？

大英博物館は世界屈指の既視感あふれる建造物だろう。だが、なんだか薄汚れている。ロンドンの低めの空の下、薄いスモッグ色？悪口が過ぎる？イフウドウドウとかテンカニカントルとか大嫌い。ヤッパ、ギリシャ建築は青い空、澄んだ空気の中に置いといて欲しい。入場料はオボシメシ！なので、私は素通りしてやった。しかし、入ってみると、ホント まともに腰を抜かした！入場したとたん、眼前にギリシャ神殿が、そのものが、そのものズバリがドーンと建っていたのだ。何年分かの吃驚をかき集めたかの衝撃。

あとはエジプトの展示が充実ぶりをみせていた。ミイラの彩色木棺などは、黒い張りつめた眼を光らせて、林立している。後年訪れたカイロ博物館より、点数的には多かったかもしれない。男のミイラがガラスケースにヌードで横たわっている。黒く痩せているけどしるしが在るか？とジロジロ見たが、残念、分からない。ラムセス二世たち石像群も、絶品・優品が多かったけど、エジプトからナポレオンが持ち出したロゼッタストーンがなんでここに在るの？

ギリシャ、ローマ、中東、アジア、素晴らしい！だけど、大英帝国の展示品はどこにあるの？ぜんぜん見かけないけど。博物館全体がなんだか盗品の見本市のよ

うな気がしてくる。

欧米各国が国力をかけ、血道を上げてよその国の歴史的美術品の保護という分捕り合戦をやった時期があったけど。

日本だってやった。大谷探検隊が中国で。隊員の生命と大金を賭けて（死線ギリギリだった）。探検費が嵩んで本願寺は危うくなったらしい。中国の僻地で、何も知らない住民から石ころみたいな値段で掻き集めた品々は、現在、大谷大学が蔵していると聞く。

貴重な北京原人の骨だって、日本軍が取り上げ、以後、行方不明になった。現在、北京原人の骨は存在しない。

翌日も博物館へ日参した。私はやっぱり博物館が好きなんだ。

入場料が寄付形式だからか？他の人の邪魔にならないように、ひっそりと写生している人をあっちでもこっちでも見かける。良い時間を過ごしてるなあ彼等。

フランスの小学生の遠足も来る。パリーロンドン間は、ユーロスターで軽く行けるお隣なのです。

ロンドン塔

私がロンドン塔なる物を初めて知ったのは、ほんの子供のころ、あの「小公子」の中だった。やはり「小公子」に出て来る、塔に押し込めた三百人の宗教者を処刑しまくった「血みどろメリー」なる女王とセットになって、おどろおどろしく私の幼い頭に刻印された、その代物に会いに行く。

地下鉄を出て重厚ないい古色の滲む街並み（当時のこと、今は知らない。随分変わったらしい）を歩く。いきなり、大ガラスばりばりの巨大近代建築がドーンと空を区切る。その巨大なビルの真ん中を貫くアーケードを抜けきると、バツタリとテムズ川河畔に出ました。川向こうにロンドン塔。丸いの長い、尖塔を

頂いたやつ。長い年月をかけ、その間次々に建て増し重ねた、様々な城砦の集合体だった。それほど高い塔は見えない。だが、入場料は高かった。二千元なり。韓国に行ったばかりだったので、あちら風に計算すると、韓国人にしたら四、五千元感覚だよね、果たしてそれだけ払って、入る気になるや否や、と同情の涙。

橋を渡って入場。塔の周りにはぐるりと幅が広く深い堀がめぐっている。今は空堀だが、ライオンを放していた時期もあったらしい。囚人が逃げ出せないように。もともとは囚人収容施設ではなく、軍事用の砦。

中庭を囲んで全部ただだ石造りの城砦ばかり。幾つもの石のタワー、その石の部屋べやを石の廊下と、すり減って丸みを帯びてしまった石の階段が繋いでいる。住むには最悪の環境か？

処刑グッズをドーダと見せられるのは、やはり覚悟をしていても、首がウソウソして来る。教会、武器の展示室もある。ガツシヤ ガツシヤと歩く亡霊かドンキホーテしか私は連想しないが、台所道具を集めたような、全身銀色に輝く同形同寸の大鎧兜群二十体ほどが、でかいガラスケースの中でピシッと整列している。

そのピカピカの金属世界のど真ん中にただ一体、日本の鎧兜が異彩を放っていた。その芸術性と言うか、死の美学と言うか、解るかな？

ギラギラ並んだ宝石を金でくるんだ王冠や、五百三十カラットのダイヤモンドをはめ込んだ玉笄など多数を集めたジュエル・ハウス。

映画「ガス灯」は、宝石に執着する、宝石の為なら殺人も辞さない、宝石に心が眩んだ男の話だが、その映画の場面。ロンドン塔のこの部屋で「イングリッド・バーグマン」たちは頑丈な鉄格子を隔てて王冠や笄を見ていた。今は鉄格子に代わって、厚いは厚いがガラスの中である。

イギリスではダイヤモンドも採れない。このまばゆさは、他国あるいは植民地からの非対価的取引や搾取・献上の輝きなのです。その植民地主義的精神構造はいまだに変わっていませんよね、タックス・ヘイブンしたりして。EU離脱がUKの本格的凋落の引き金になるかもしれないとゾクゾクします。

中庭の何気ない一角は、幾世紀にもわたる権力闘争や宗教上の争いの犠牲者たちの数限りない血の流された処刑場だった。アーメン。

有名な、タワー・ブリッジはロンドン塔のすぐ先。テムズ川に沿って遊歩道を橋の方へブラブラする。ロンドン塔見学の気鬱よ、川風に乗って、飛んでけー。

ナショナル・ギャラリー

地下鉄チャリングクロスの改札をでる。すぐに水が抜かれた大噴水の底みたいなトラファルガー広場が現れる。

学生の頃読んだ、黄色と黒の表紙の「コリン ウイルソン」の小説。確か題名は「闇のなかの祝祭」だったと記憶している。その冒頭、後に富豪の殺人者と親

しくなる主人公もまた、地下鉄からこの広場に出て小
糠雨に陰気に濡れる。世界中に流布された、イギリス
の未解決猟奇的連続殺人事件、「切り裂きジャック」を
下敷きにした物語の、隠微な雰囲気の序奏だが、今日
はまだ晴天。この時期？ロンドンは一日一度はいきな
り曇りだし、濡れるほどではないがバラ、バラとくる。
ライオン像が四方を固めている立派な台座から伸びた
高きイギリシヤ風の柱、その柱頭に右目右腕を失いな
がら戦い、最後にかのバルチック艦隊をトラファルガ
ー沖に沈め、イギリスを救いながらも戦死したネルソ
ン提督の像が掲げられている。高すぎてよく見えない。
アメリカの自由の女神がさらにもう一本付け足した高
い柱の上に立っていると想像してもらいたい。

その真ん前にナショナル・ギャラリーはある。ここ
も寄付だったので、フリーパス。

言い訳になるけど、UKには膨大な数のナショナル
トラスト（ロンドン塔 ストーンヘンジ等）なるもの
がありまして、法外？な入場料を払われます。

ダ・ビンチ、レンブラント、ボッティチェリ。展示
室、もう幾つ廻った？わー 疲れるう。イギリス人画
家はターナーしか知らないけど、どこで見られるの？
かの有名な「レディ・ジェイン・グレイの処刑」は

何番目かの展示室の入って直ぐに架かっていた。バー
ンとデカイ！ほとんど天井から床までの大きさ。私で
も知ってる位有名過ぎる絵なのに、人だかりはない。
暗い処刑室。ロンドン塔で展示されていたのとそつく
りな首切り斧を下げた処刑人。目隠しをされ、真珠色
のドレスの膝をつき、床に置かれた日本の高枕を思わ
せる断頭台を、おぼつかなく手探りする一六歳の美少
女、ジェイン・グレイ。泣き崩れ、あるいは失神寸前
の侍女たち。

物知らずの私は、危うくこれはターナー作かと誤ると
ころだった。フランス人の画家だった。どうりで処刑
自体は、この絵に画かれているように屋内ではなく、
あのロンドン塔の中庭で執行されたはず。

アルチンボルドの愉快な絵もある。日本でも江戸期に
複数の人体で顔を画いたり滑稽画は多数ありますぞ。

絵疲れも極まり、食堂へ。

食堂は人が集中する時間帯、込み合っていた。大英博
物館もナショナル・ギャラリーも食堂はいただけない。

「これは学生食堂だよ、昔の」

おまけに日本ならワンコインで済む程度の昼飯がオド
ロキの千五百円。どうりで街で繁盛しているのは、メ
ッタヤタラあるサンドイッチ屋さんばかり。真ん中に

ズンとナイフで切れ目を入れたこつぺぱんにお客たちは、お好みをてんこ盛りにもしてもらい、往来なんかでガブリ付いている。

私は、ケースからチョップピリをトレイに取って（だつて、お高いんだもん）そこだけはやたら立派なレジへ。二人掛けのテーブルを奥の隅っこにやつとみつけ納まる。びつしり詰め込まれた中年・老年の白人たちが黙々と一心不乱にクチャクチャやっている図は、なんだかもの悲しさが漂う。

典型的ハンプティ・ダンプティ（たまご型）体型の、仕立ての良いオーバーを着た老人が、私の斜め前の一つだけ空いていた一人掛けのテーブルに満載のトレイをのせた。オーバーを脱いでポンポコポンのお腹を何とかテーブルと椅子の間に挟み込もうと、もがくもがく。私は見かねて、こちらにどうぞと助け舟

「私は　すぐ終わりますから」

「いやいや　どうぞ居て下さい。居て下さい」

老人はこの近所のフラットに一人で住んでいるエジプト系だった。日課のようにギヤラリー通いをしているらしい。私には、彼はただのロンドンっ子に見えたけど。ロンドン是人種のごった煮状態。タランチェラムみたいな手で、世界中に植民地をゲットして来た結果が

これだ。特に香港系がごろごろ歩いていて、私の日本人意識も行方不明。しかし、博物館・美術館入場人口となると白人が圧倒・席捲している。どうして？

夫の出張先のウインザーに滞在している、と私も話す。

食事を終え、彼と別れ、絵画鑑賞の続き。胃が大きくなったとたん、けだるさがやってくる。足が重たくなってくる。有名どころの画家の作品はもう見てしまったよ、と思う。そこへ、あのエジプト老人が現れた。

「おお　奇跡じゃないか」悪い奇跡もあることが判明。ギリギリ私の手を握る。決して離さない。シネマに行こう。僕のフラットへ。勿論、鑑賞者たちの眼前、（何やってんの、ギヤラリーよ）と彼等の眼が怒ってる。

彼が諦めて去るまでの二十分は嵐だった。殴るのが正解かもしれないが、あいにく、人を殴った・殴られた経験がない。一度練習しなくちゃ。

彼の待ち伏せを恐れて裏口からヒヤヒヤと外へ出た。情けないことに。

トラファルガー広場から王宮広場は、後に、ロンドンオリンピックのマラソンコースの一部になった。

広場のすぐ前が凱旋門、アドミラルティ・アーチ。パリの凱旋門と異なり、弧を描いて拡がる。が、交通の

邪魔物になつているところは同じく。それからザ・マルが始まる。ザ・マルは王宮へと続くプロムナードか？とにかく道路と園庭・池・噴水・芝生等が一体となり延々と続き、バツキングダム宮殿前広場で終わる。

例の衛兵の立つバツキングダム宮殿は案外小さくて、拍子抜けしてしまつた。

イギリス支社

休日。夫が毎日通つていゝる支社を見せたい、と言う。ロンドンへ行くのに私はスラウ経由で行つていたが、ウインザー・イートンには別方向まわりでロンドンへ行く電車の駅がちよつとだけ離れたところにある。夫の会社はその沿線に近いらしい。その電車の駅舎は小さいロータリーは付いてゐるものの、揃いもそろつて、まあ可愛い。お菓子の家。外目には駅とは思えない。ただのお店だったり、歯医者だったり。そこに、ポチツと改札口があるらしい。前回のイギリス出張時に夫が借りたアパートは、今回と同じ大家さん、やはり家賃三十万円也だが、そのアパートにはチョコナンと駅が付いてゐた。部屋の窓を開けると、すぐそこがホームだつたらしい。可愛い過ぎる駅舎の連続を見てゐる

と、辺りが童話の世界っぽく見えてくる。

しかし、そのうち、何やら金の匂いが。辺りの様子が明らかにウインザーの市街地と異なる。ふんだんの緑が冴え冴えと広がる。まばらな家々の庭がグリーンと広い。どの家も余裕シヤクシヤクの戸建て。

「ここはミリオンのキヤツシュのエリアなんだ」

つまり、百万ポンドを超える金融資産持ちばかりが居を構えてるエリアだつていうこと。

夫の勤め先は、またその先。

まず、門衛付きの立派なゲートがあつた。夫が会釈すると、門衛は二人して最大限の笑顔。鍵を手渡ししてくれる。私が乗つてゐるから盛大なお愛想？そうだようだよ。

ドライブウェイの左右は緑ばかり。支社らしきものは見えない。そのうち右手に芝生が現れ、立派な煙突が二階の屋根から突き出ている、大き目の普通の家が建つてゐる。そこで停車。

「え、ここ？」

屋内は暖炉も冷蔵庫もある、居心地よさそうな居間。ぜんぜん、会社っぽくない。二階にやつと、しかし贅沢な会議室。夫用デスクのある部屋やプライベートルームは別の鍵がかかつていて見せてもらえなかつた。

外は、よく手入れされた広い花壇、プロムナード、木立。これって公園ジャン。広大なまでは行かないにしても、穏やかに波打つ緑の不思議な空間に、ポツンポツンと支社と大小はあるものの似た建物。

貴族の屋敷跡だそう。館は失われていたが、長あゝい厩舎は使われないまま残っている。屋敷跡に建屋を建てたか建てさせたかして、賃貸しているらしい。これって、私愛読のアガサ・クリステイの世界？お仕着せの執事、家人に傳いたり、清掃や居間付きの大勢の女中たち。パラソルの下で優雅に寛いだり、狩りから戻る滞在客たちを、ここに幻想してしまう。

帰りにスパーテスコ（世界規模でスパーチェーンを展開している）に寄った。平屋。清潔でゆったり、のんびりした雰囲気。イトインもある。秦野のスパーと規模も内容も大して変わらない。が、客が少なく、陳列に余裕があった。食品の大多数にオーガニックの品物と、そうでは無いものが並列してある。生魚は芸術的に並べられ、高額。そして、考えられないほど肉の塊がデカイ。豚も牛もゴロゴロと足一本丸ごと転がっている。総じて秦野の一・五倍見当の物価かなあ。パンだけはバカみたいに安かったけど。大袋入り

の小粒のリンゴも安く買って買った。ロンドンっ子もこれを齧りながら闊歩している。夫はビニール袋が要るかと思わずレジで聞かれる、と言うけど、マイ・バッグを持っていく人は見かけなかった。

帰国の日。夫はヒースローまで送ってきた。空港へのジャンクション。夫は他の車に進入が逆だと激しく合図を送られ、胆が冷えた。私も筑波万博の時、谷田部で降りそこない、降り口を二十mオーバーランしてバックで戻り、家族のブーイングを浴びた。夫の不調で急ぎよ私が運転を替った時だ。夫は一度、アメリカでも高速を逆走し、死が頭の中で大写しになったと言う。何とか順当な場所に戻った時には呼吸もやっと、暫く運転を再開できなかつたらしい。今回は車がまばらで、それ程の危機感は無かった。

正規の道に戻り気持ち解放した刹那、総てを圧する地鳴り・地響き・轟音・爆音がとどろき、体がベチャツと押し潰されてしまった。

「コンコルドだ」夫の裏返った声。
怪鳥は私をバラバラにして飛び去った。